

結果構文のタイポロジーに向けて

影山太郎

1. はじめに

結果構文は近年の意味論・統語論で最も注目されている構文の1つであるが、これまでの研究は英語、日本語、あるいはゲルマン諸言語の個別的な研究に集中しており、世界諸言語における結果構文の類型化という大きな課題については、まだほとんど手がつけられていない。本稿では、結果構文のタイポロジーを考えるための予備的考察として、類型化の基礎となる意味的な基準を素描し、少数の言語（英語、日本語、イタリア語、ハンガリー語）に試験的に当てはめてみる。

世界諸言語の結果構文を類型化する際の基本的問題は、次の2点である。

- 「異言語間の分布」の問題：結果構文を持つ言語と持たない言語の違いは何に由来するのか。
- 「単一言語内の分布」の問題：結果構文を持つ言語の内部でも、動詞と結果述語の組み合わせによって結果構文の容認度に差があるのはなぜか。

「異言語間の分布」の問題について。**Snyder (1995, 2001)** は、結果構文（形容詞結果述語）を持つ言語と持たない言語を分類し、ある言語における結果構文の有無は、その言語に **N-N** 型の複合名詞が生産的に作られるかどうかと対応すると主張している。すなわち、**Snyder** は「原理とパラメータの文法」(**Chomsky 1981**) のマクロ・パラメータの考え方を採り、「複合語パラメータ」の値がプラスの言語は結果構文を有し、マイナスの言語は結果構文を持たないと提案している。しかしながら、**Snyder** の複合語パラメータが妥当性を欠くことは、日本語を見ただけで分かる。日本語は、**Snyder (1995: 31)**

では「結果構文なし」「N-N 複合語なし」と見なされ、他方、Snyder (2001: 329) では「結果構文あり」「N-N 複合語あり」となっていて、明らかに矛盾が生じている。その矛盾は、影山 (1996) の「本来的结果構文」と「派生的結果構文」の区別ができていないことに起因している。日本語は本来的结果構文は持つが、派生的結果構文は持たない。この違いを無視して、結果構文のタイポロジーを論じることは適切でない。

本来的和派生的の区別を踏まえると、より妥当な分類は (1) のようになるだろう。

(1)	本来的结果構文	派生的結果構文
タイプ I. フランス語など	NO	NO
タイプ II. 日本語など	YES	NO
タイプ III. 英語など	YES	YES
タイプ IV. 該当無し (?)	NO	YES

本来的结果構文とは、結果述語が表す概念が主動詞の意味構造に含まれる場合であり、派生的結果構文とは、結果述語が表す概念が主動詞の意味構造に含まれない場合である。これに類似する区別が、Washio (1997) の **strong vs. weak resultatives** と、Dimitrova-Vulchanova (2003) の **connected vs. disconnected resultatives** にも見られる。しかしながら、後で述べるように、本来的和派生的の区別は単純な二値対立ではなく、それぞれの内部に下位区分を持つ段階的な分類である。従って、生成文法の二値的なパラメータでは扱えない。

本来的结果構文と派生的結果構文を、プラス・マイナスの二値的なパラメータとすると、(1) に掲げた 4 つの言語タイプができるはずであるが、実際には、タイプ IV は該当する言語が見あたらない。このことは、本来的和派生的の対立がそれぞれ対等なパラメータではなく、後者(派生的)が前者(本来的)の存在を含意するという含意的階層に該当することを示している。含意的階層というのは、Keenan and Comrie (1977) の名詞句接近性の階層に代表

される概念で、たとえば、関係節化において、言語 A では主語だけが関係節化でき、言語 B では主語と直接目的語が関係節化でき、さらに言語 C では主語と直接目的語と斜格目的語が関係節化できるというように、文法規則の適用範囲が、主語>直接目的語>斜格目的語という一般的な階層に基づいて段階的に分布するという考え方である。この考え方によると、たとえば主語と目的語は関係節化できないのに斜格目的語だけは関係節化できるというような言語は存在しないことが正しく予測される。

本稿で提唱するのは、このような含意的階層に基づく普遍性（含意的普遍性 **implicational universals**）である。まず、第 2 節で結果述語の段階性を主動詞のクオリア構造によって明確化する。結果述語の段階性とは、結果述語の表す変化結果がどの程度、主動詞の辞書情報から予測できるかという辞書的知識に由来する。これを踏まえると、「異言語間の分布」だけでなく、「単一言語内の分布」という問題も端的に説明できるようになる。本稿で取り上げるのは日本語、ハンガリー語、イタリア語、英語という限られた言語であるが、辞書情報の含意的階層に応じて結果述語の適否が変動することが明らかになる。また、上述の言語はそれぞれ系統が異なるから、第 2 節で提示する結果述語の含意的階層が普遍性のある法則であることが示唆される。

2. クオリア構造による英語結果述語の分類

結果構文のタイポロジーを考える際の基盤となるのは、統語構造ではなく意味構造である。なぜなら、統語構造は言語によって異なるが、語彙の意味構造は普遍的と考えられるからである。この考え方に基づいて、影山（2005、印刷中）では、主動詞のクオリア構造によって結果述語を幾つかのタイプに類型化することを提案している。まず、動詞のクオリア構造（特質構造とも呼ばれる）として、Pustejovsky（1995）の考え方ではなく、筆者独自の構造を次のように規定する。

(2) 動詞のクオリア構造

- a. 形式役割=その動詞が表す事象 (eventuality) のタイプ (activity, state, process, transition)
- b. 構成役割=その動詞の語彙概念構造 (LCS) (影山 (1996) で想定したような構造化された意味表示)
- c. 目的役割=その動詞が本来的に含意する動作目的
- d. 主体役割=その動詞表現が成立するための前提 (presupposition) やフレーム (場面や背景状況)

これに基づくと、英語の結果述語は (3) のように下位区分することができる (詳しくは影山 (2005, 印刷中) を参照)。

(3) 結果構文の含意的階層

状態が含まれる (LCS に結果)	(A) drain the glass dry タイプ: 主動詞の LCS に変化結果が記載され、しかも、その主動詞の事象タイプが transition である。
	(B) wash the shirt clean タイプ: 主動詞の LCS に変化結果が記載されているが、事象タイプは process である。
(LCS には結果状態が含まれない) 派生的結果構文	(C) wipe the table clean タイプ: 主動詞そのものの LCS は ACT (ON) であるが、目的役割に対象物の特定の変化結果を含む。結果述語は、その目的役割に示された変化結果に対応。
	(D) pound the dough flat タイプ: 主動詞は辞書表記として目的役割を含むが、その中身は 1 つに特定されていないので、慣習化の範囲内で様々な結果述語が可能。
	(E) kiss the princess awake タイプ: 主動詞は本来は目的役割を持っていないが、意図的な状況において何からの目的役割がオンラインで作り上げられる。
	(F) drink the pub dry タイプ: 主動詞の行為によって偶発的に生じる結果を表す。表現の範囲が限られ、許容度も低い。
	(G) drink someone under the table タイプ: 特定の動詞・目的語・結果述語の組み合わせに限られたイディオム。誇張表現と解釈されることが多い。

この下位分類は、「本来的」対「派生的」の区別を精緻化したものである。G はイディオム化したものであるから除外すると、A から F に下がるほど、結果述語が主動詞の意味から予測しにくくなる。A と B では、結果状態が主動詞の LCS に定項として指定されている。C と D の変化結果は、主動詞そのものから論理的に含意されない（つまり LCS に直接含まれない）ものの、目的役割において「行為目標」として記載されている。たとえば「テーブルを拭く」という行為には通常、そのテーブルをきれいな状態にするという目標がある。E と F では、そのような特定の目標が主動詞の意味として含まれているのではなく、現実世界の行動において偶発的に生じる状態変化である。

このように「主動詞から予測される可能性」という観点からすると、A が原型（プロトタイプ）であり、下に行くほど、予測可能性が下がり、周辺的となる。また、ある言語において、下位のタイプが存在すれば、必ずそれより上位のタイプも存在することが含意される。その意味で、(3) の序列は含意的階層を形成している。

(3) の各欄には英語例を 1 つずつしか挙げていないが、意図的に他動詞の例を示している。すなわち、A から E の英語例はいずれも、結果述語を取り除いても文法的に成立する他動詞文である。ところが、従来の英語結果構文の研究においては、Simpson (1983) 以来、*She wiped the shoes clean.* のように主動詞が他動詞なのか、それとも *She sang the baby to sleep.* のように自動詞（他動詞の目的語を表示しない擬似他動詞を含む）なのか——言い換えると、目的語が主動詞によって意味役割を与えられるかどうか——という構文上の基準が重要であるとされ、Wechsler and Noh (2001) は前者を Control 型、後者を ECM 型と名付けているほどである。しかしながら、諸言語を比較すると、あらゆる他動詞を一律に扱うことには問題がある。影山 (1996) で指摘したように、日本語では、目的語の状態変化を含意する他動詞（「靴をピカピカに磨く」）では結果構文が成り立つが、目的語の状態変化を含意しない他動詞（「*靴をピカピカに擦る」）では結果構文が成立しない。従って、直接目的語に意味役割を付与するかどうかという統語的な基準ではなく、(3)

のような辞書の意味情報が重要であるということになる。

これに基づいて、世界諸言語を見ると、結果構文を持つ言語は、A から F のどこにカットオフポイントがあるかによって、類別化することができる。たとえば、日本語は A と B しか持たないが、英語は A~F のすべてを持っている。また、後で述べるハンガリー語では D あたりにカットオフポイントがある。

(3) の含意的階層は、世界諸言語を分類するだけでなく、同一言語内における結果述語の性質を下位区分する働きもする。英語は A~F の総てを持つとされるが、しかし総ての英語話者が A~F の全タイプを均等に受け入れるわけではない。E や F は、許容できない（あるいは、聞いて理解することはできるものの、自分では使わない）というネイティヴスピーカーも少なくない。更に、A~F の総てを認める話者でも、結果述語の統語的振舞いを精査すると、段階的な差異が感じられるようである。影山（印刷中）では、結果述語が分裂文で抜き出すことができるかどうかを調査し、許容度が次のように段階的に区別されることを明らかにしている。(4 a) は A, B タイプ, (4 b) は C, D タイプ, (4 c) は E, F タイプの例で、下に行くほど、許容されなくなる。

(4) a. **They painted their house dark green.** →

It was dark green that they painted their house.

b. **She shook her husband awake.** →

??**It was wide awake that she shook her husband.**

c. **They drank the pub dry.** →

***It was dry that they drank the pub.**

従来の研究では、A タイプから F タイプまでの英語の結果構文をすべて均等に扱ってきたが、分裂文の抜き出しという統語的操作を当てはめると、A から F が一枚岩ではなく、段階的な差異があることが明らかになる。

これに近いことは、**push the door open** に対する [_v **push open**] **the door** のような V-A 複合化にも見られる。Taniwaki (2006) で示されているように、(例外もあるが) 基本的には A から F に下がるにつれて複合化が難しく

なってくるようである

(5) A タイプ: Mother bleached white the shirt.

B タイプ: Cinderella swept clean the floor.

C タイプ: Mary scrubbed clean the floor.

D タイプ: * John hammered flat the metal.

E タイプ: * The dog barked awake the man.

F タイプ: * They drank dry the pub. (Taniwaki 2006)

(3) の含意的階層は、歴史的な変化の方向を予測することもできる。英語の歴史において、現在の多様な結果構文がどのようにして発達してきたかは、まだ解明されていないが、少なくとも OED と Visser (1963) を見たところでは、古英語 (Old English) と中英語 (Middle English) では、本来的な結果構文しかなく、今日のような派生的結果構文は存在しなかったのではないかと推測できる。(6 a) では、古英語、中英語に相当する現代語の単語を用いて例示しておく。

(6) a. 古英語と中英語における本来的結果構文の例 (Visser 1963: 582)

'wash clean', 'chop small', 'dye green/blue', 'paint black', 'grind small', 'shave clean/smooth', 'sweep clean', 'strip naked', 'pouder (=powder) small'

b. 現代英語における派生的結果構文の例

1565 Cooper Thesaurus, To vomitte or sleape away his dronkenness. (OED)

1611 Shakespeare, Cymb. And cry my selfe awake? (Visser 1963)

1797 T. Wright. We therefore shouted the landlord out of bed. (OED)

以下では、結果述語の含意的階層が成り立つかどうかを幾つかの言語で試してみる。

3. 日本語の結果構文

日本語には本来的結果構文しか存在しないことは既に影山（1996）で指摘されているが、第2節で述べた結果述語の意味的なタイポロジーに基づくと、日本語の中で、さらに精密な観察が可能になる。

まずAタイプは、結果述語の表す状態が主動詞の本来の意味から含意される場合、すなわち結果述語の表す概念がLCSに定項として表示されている場合であり、これが影山（1996）で本来的結果構文と呼ばれるものに相当する。他方、本稿でBタイプと分類される「きれいに洗う、きれいに掃除する」などに関して、影山（1996）ではこれらの「きれいに」という表現は結果述語ではなく、副詞であると見なし、結果構文から除外している。他方、「服をきれいに洗う」は英語の **wash the clothes clean** に対応すると思われることから、日本語の「きれいに」も結果述語であると見なす研究者もいる。実際、次の例文を比べると、明らかに「丸く」が動作様態であるのと比べると、「きれいに」は結果述語ではないかと思える。

- (7) a. 四角い部屋を丸く掃いた。
 b. 四角い部屋をきれいに掃いた。

ところが、筆者の内省によると、「嫌なことをきれいに忘れる」のような副詞の「きれいに」（つまり、「跡形が残らないように完全に」という意味）と、「彼女はきれいになった」のように文字通り「きれいである」という状態を意味する形容動詞の「きれいに」とは、アクセントが異なる。

- (8) a. 副詞の「きれいに」：嫌なことは、**kireEni** 忘れなさい。
 b. 形容動詞の「きれいに」：彼女は最近、**KIreeni** になった。

アクセントの観点から結果構文を見ると、筆者の方言では次のようになる。

- (9) a. 部屋の床を {^{ok}kireEni/*KIreeni} 掃いた。
 b. 汚れたシャツを {^{ok}kireEni/*?KIreeni} 洗った。

この判断が正しいとすると、「きれいに掃く、きれいに洗う」など——仮に、

これらの動詞を「清掃動詞」と呼んでおく——は結果構文でないことになる。

B タイプが **A** タイプと異なることは、語順の入れ替えにも指摘できる。**A** タイプの結果述語は、目的語の前に移動した場合 (**10 a**) でも結果述語としての解釈を保っている。これに対して、清掃動詞の場合には、「きれいに」を目的語の前に持って行くと (**10 b**)、結果の意味は消滅してしまう。

(10) a. 彼女は、こなごなに茶碗を割った。(結果の意味で成立)

彼女は、真っ白に部屋の壁を塗った。(結果の意味で成立)

b. #彼女は、きれいに部屋を掃いた。(掃いた結果、きれいになったとは解釈できない)

#彼女は、きれいに下着を洗った。(洗った結果、きれいになったとは解釈できない)

#彼女は、まっすぐに髪をブラッシングした。「まっすぐに」はブラッシングの動作様態としてしか解釈できない)

同じような対比が擬似分裂文に変換したときにも観察される。

(11) a. 彼女が茶碗を割ったのは、こなごなにだ。

彼らが部屋の壁を塗ったのは、真っ白にだ。

b. #彼女が部屋を掃除したのは、きれいにだ。(結果の意味ではない)

#彼女が髪をブラッシングしたのは、まっすぐにだ。(結果の意味ではない)

これらの観察から、清掃動詞と一緒に用いられた「きれいに」は様態副詞であって、結果述語の資格は持たないと結論づけることができるだろう。

しかしながら、更に考察を深めると、ある場合には、このような「きれいに」でも結果述語と見なしてよいと思われることがある。まず、注意したいのは、上に挙げた例文がすべて過去形で提示されていたことである。過去形は、実際にその状態変化が起こったという達成 (**accomplishment**) の意味を強調する。これに対して、「洗っているところ／洗っている最中」のように、プロセスの途中を表すような環境においては、「きれいに」が(行為によって予想される)変化結果を意味するという解釈が可能になるように思われる。例を作

ってみよう。

- (12) a. 彼女が、汚れたシャツをきれいに洗っているところに（最中に）、
彼がやってきた。
- b. 彼女が、床をきれいに掃いているところに（最中に）、彼がやって
きた。

これらの例は、単純過去形で用いた場合と比べて、結果述語としての容認性が高まるように思える。ただし、結果述語としての容認性と言っても、まだ、「きれいに」という変化結果が生じているわけではない。

これに対して、A タイプの結果述語は、同じプロセスを表す環境に置かれても、少なくとも対象物の一部分は、示された結果状態を既に帯びているという解釈になる。

- (13) a. 彼女が茶碗をこなごなに割っているところに（最中に）、彼がやっ
てきた。（既に、いくつかの茶碗がこなごなに割られている）
- b. 彼らが部屋の壁を真っ白に塗っているところに（最中に）、彼がやっ
てきた。（既に、壁の一部は白く塗られている）

上で観察された A タイプと B タイプのアスペクトの違いは、第 2 節のクオリア構造で端的に捉えることができる。すなわち、A タイプは LCS（すなわち、クオリア構造の構成役割）において使役変化の意味構造をとるだけでなく、事象タイプ（クオリア構造の形式役割）においても推移（**transition**）として表示されるから、主動詞の文法的アスペクトに関わりなく、常に結果を含意する。これが純粋な「本来の結果述語」である。

他方、清掃動詞の場合は、LCS（構成役割）においては使役変化の意味構造を有するものの、事象タイプ（形式役割）においては過程（**process**）として表示される（なぜなら、「3 時間、その部屋を掃除した」と言えるから）。事象タイプが「過程」であるために、このグループの結果述語は、通常の単純過去形では認可されず、「している最中」のような継続アスペクトの環境においてのみ正当な結果述語として認められる。このような違いにも拘わらず、A タイプと B タイプの結果述語は、いずれも主動詞のクオリア構造における構

成役割 (LCS) において記述されているという点で、「本来的結果述語」として一括りにできる。

では、C タイプ以下は、どうなるのだろうか？ これらは、基本的に、日本語には存在しないと言ってよい。「*鉄をペシャンコにたたき、*地面にさした杭をグラグラに揺する」のような文は、時制やアスペクトに関わりなく、日本語として非文法的と判断される。

(14) a.?*彼が熱した鉄を平たくたたいているところに (最中に)、彼女がやってきた。

b. *彼が杭をグラグラに揺すっているところに (最中に)、彼女がやってきた。

ちなみに、英語の結果構文もこのような継続アスペクトの環境に置かれると、結果述語のタイプに応じて解釈が変わってくる。

(15) a. A タイプ

She was tearing the letter to pieces, when I entered.

They were painting their house white, when I saw them.

B タイプ

She was ironing the shirt flat, when I entered.

She was combing her hair smooth, when I entered.

b. C/D タイプ

She was hammering the metal flat, when I entered.

She was kicking her husband awake, when I entered.

c. E/F タイプ

***John was sneezing the sheet off the table when I caught it.**

(Dimitrova-Vulchanova 2003)

(15 a) では、既に **to pieces**, **white** という結果が (一部) 実現しているが、(15 b) では **flat**, **awake** はこれから実現するはずの目標を表すと解釈される。更に、(15 c) は進行形にできない。

4. イタリア語の結果構文

ロマンス言語は、全般的に結果構文を持たないとされるが、Napoli (1992)によると、イタリア語では（何人かの話者には）結果構文が成立することがある。

(16) a. *Quel macellaio taglia le carni sottili.*

'That butcher cuts meats thin.' (Napoli, p. 72)

b. *Mia figlia ha cucito la gonna (troppo) stretta.*

'My daughter sewed the skirt (too) tight.' (Napoli, p. 74)

Napoli は、イタリア語で結果構文が成立するのは主動詞が表す自然な終着点 (**natural endpoint**) を際立たせる場合に限られると述べている。本稿の辞書情報による類型に当てはめると、比較的誰にも受け入れられるのは (16 a, b) のような A タイプである。ただし A タイプでも、(17 a) より (17 b) のほうが容認度が高いことから分かるように、結果述語の情報量を増やしたほうが結果構文が成立しやすい。

(17) a. *?Li abbiamo scoloriti bianchi.*

'We bleached them white.'

b. *Li abbiamo scoloriti quasi, ma non perfettamente, bianchi.*

'We bleached them almost but not perfectly white.' (Napoli, p. 76)

結果述語に大きな情報が必要であることは、次の B タイプの例で一層明瞭になる。

(18) a. **Ho stirato la camicia piatta.*

'I ironed the shirt flat.'

b. *Ho stirato la camicia piatta piatta.*

'I ironed the shirt flat flat (=very flat).'

 (Napoli, pp. 74–75)

(18 a) は *piatta* 'flat' 1 つだけなので不適格であるが、(18 b) のように

piatta piatta と繰り返して意味を強調することで適格になる。しかしそれでも、D タイプ以下になると、誰にも許容されない文となる。

(19) ***Gianni ha martellato il metallo piatto.**

‘**Gianni hammered the metal flat.**’ (Napoli, p. 77)

ここで興味深いのは、次のような **Napoli** の指摘である。すなわち、通常の定形文では容認されない結果構文でも、レシピ文のように命令形に置かれると、ほとんどの話者にとって容認度が上がる。

(20) a.***Maria sbatte le uova cremose.**

‘**Maria is beating the eggs creamy.**’

b. **Sbatti le uova cremose.**

‘**Beat the eggs creamy.**’ (Napoli, p. 78)

料理説明文では、まだ実際には変化が起こっていないから、正確には結果述語と言えない。むしろ、目的役割に記載された「クリーム状になるまで」という動作目標を表す表現であると考えられる。日本語でも、「ボウルに卵とバターを入れて、クリーム状にかきまぜます (レシピ文)」のほうが、「ボウルに卵とバターを入れて、クリーム状にかきまぜた。」という過去形より自然なように感じる。

イタリア語の結果構文は、語彙的な制限の他にも、意図的行為かどうか、瞬間的な変化かどうかといった制限がある (詳しくは **Napoli** 論文)。しかし基本的には、結果構文が主動詞の辞書情報に依存するという本稿のアプローチが有効であると思われる。

5. ハンガリー語の結果構文

ハンガリー語では、不定目的語、形容詞、副詞、接頭辞など動詞修飾語 (**verb modifier**) と呼ばれる表現が動詞の直前に置かれて、動詞に関連する様々な概念を表す (**Komlósy 1994**)。結果構文もこの動詞修飾語を利用して作られるが、結果述語が形容詞 (21 a) の場合と接頭辞 (21 b) の場合とがあり、両者

で制約が異なる。

(21) a. Péter piros-ra festette a kerítést.

Peter red-onto painted the fence-ACC

‘Peter painted the fence red.’

b. A kutya fel-ugatta a szomszédokat.

the dog prefix-barked the neighbors

‘The dog barked the neighbors awake.’ (Bende-Farkas 2000)

Bende-Farkas (2000)によれば、接頭辞を用いた結果構文は、自動詞でも可能であるが、形容詞を用いた結果構文は自動詞では不可能で、他動詞に限られる。ここで生じる疑問は、形容詞を用いた場合、どのような他動詞でも許されるのかという点である。論理的な可能性としては、ハンガリー語でも、主動詞の辞書情報によって、結果構文の成否が分かれることも考えられる。ハンガリー語の結果構文に関する網羅的な研究が管見にないので、インフォーマントに確かめてみた。インフォーマントチェックにあたっては、神戸大学大学院生の江口清子氏に協力してもらった。

まず、(22)はAタイプの例である。

(22) Aタイプ

a. Mari piros-ra festette a kerítést.

Mary-NOM red-onto paint-PAST. 3 SG. DEF the fence-ACC

‘Mary painted the fence red.’ (Bende-Farkas 2000)

b. ?János száraz-ra ürít-ette a pohar-at.

John-NOM dry-SUB drain-PAST. 3 SG. DEF the glass-ACC

‘John drained the glass dry.’

Aタイプは、基本的に「形容詞結果述語+動詞」が認められるものと思われる。ただ、インフォーマントによると(22b)は“questionable”という判断になっている。これは、**drain**と**dry**が意味的に冗長であるためではないかと推測される。

BタイプとCタイプも結果構文が可能である。

(23) B タイプ

- a. Mari tisztá-ra mos-ta a ruhá-t.
 Mary-NOM clean-SUB wash-PAST. 3 SG. DEF the clothes-ACC
 ‘Mary washed the clothes clean.’
- b. Mari simá-ra fésül-te a haj-á-t.
 Mary-NOM smooth-SUB comb-PAST. 3 SG. DEF the hair-POSS-ACC
 ‘Mary combed her hair smooth.’

(24) C タイプ

- a. Mari álm-ba ringatta a gyermeket.
 Mary-NOM sleep-into cradle-PAST. 3 SG. DEF the child-ACC
 ‘Mary cradled the child to sleep.’ (Bende-Farkas 2000)
- b. János lapos-ra kalapál-ta a fém-et
 John-NOM flat-SUB hammer-PAST. 3 SG. DEF the metal-ACC
 ‘John hammered the metal flat.’

ここまでは、主動詞がその LCS あるいは目的役割において、なんらかの明確な変化結果を指定する場合であった。これに対して、特定の変化結果を直接的に含まない D タイプでは、周辺的な許容度になる。

(25) D タイプ

- a. ?A herceg éber-re csókol-ta a hercegnő-t.
 the prince-NOM awake-SUB kiss-PAST. 3 SG. DEF the princess-ACC
 ‘The prince kissed the princess awake.’
- b. ??Mari éber-re ráz-ta a férj-é-t.
 Mary-NOM awake-SUB shake-PAST. 3 SG. DEF the husband-POSS-ACC
 ‘Mary shook her husband awake.’

更に、予測不可能な E タイプにおいては、結果構文が排除される。

(26) E タイプ

- a. *János száraz-ra itta a kocsmá-t.
 John-NOM dry-SUB drink-PAST. 3 SG. DEF the pub-ACC

‘John drank the pub dry.’

b. *A kutya éber-re ugatta a szomszédokat.

the dog-NOM awake bark-PAST. 3 SG. DEF the neighbor-PL. ACC

‘The dog barked the neighbors awake.’ (Bende-Farkas 2000)

以上、極めて限られた範囲での調査であるが、ハンガリー語の形容詞結果構文の成立においても、第2節で述べた主動詞の辞書情報が重要な鍵となることが明らかになった。とりわけ注目したいのはDタイプの例(25)である。これらは他動詞を含むものの、結果構文が十全には成り立たない。従来のごとくの研究で想定されてきた「自動詞型」対「他動詞型」という対立は不十分であり、他動詞であっても、クオリア構造で記述される結果述語の含意的階層によって結果構文の成否が決まってくるのである。

参照文献

- Bende-Farkas, Ágnes (2000) “Complex Predicates and Discourse Referents: The Case of Hungarian,” <http://www.ims.uni-stuttgart.de/~agnes/papers/zas.pdf>
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Dimitrova-Vulchanova, Mila (2003) “On Two Types of Result: Resultatives Revisited,” in *The Proceedings of TROSS*, Trondheim Summer School. <http://edvarda.hf.ntnu.no/ling/tross/>
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版.
- 影山太郎 (2005) 「辞書の知識と語用論的知識——語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No. 1』 65–101. ひつじ書房.
- 影山太郎 (印刷中) 「英語結果述語の意味分類と統語構造」, 小野尚之 (編) 『結果述語の意味論』 ひつじ書房.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie (1977) “Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar,” *Linguistic Inquiry* 8: 63–99.
- Komlósy, András (1994) “Complements and Adjuncts,” in Ferenc Kiefer and Katalin É. Kiss (eds.) *The Syntactic Structure of Hungarian* [*Syntax and Semantics* 27], 91–178. New York: Academic Press.
- Napoli, Donna Jo (1992) “Secondary Resultative Predicates in Italian,” *Journal of Linguistics* 28: 53–90.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

- Simpson, Jane (1983) "Resultatives," in Lori Levin et al. (eds.) *Papers in Lexical-Functional Grammar*, 143–157. Indiana University Linguistics Club.
- Snyder, William (1995) *Language Acquisition and Language Variation: The Role of Morphology*. Unpublished Ph.D. dissertation, MIT.
- Snyder, William (2001) "On the Nature of Syntactic Variation," *Language* 77: 324–342.
- Taniwaki, Yasuko (2006) "Resultative Verb-Adjective Combinations as Lexical Compounds," 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No. 2』 251–280. ひつじ書房.
- Visser, F. Th. (1963) *An Historical Syntax of the English Language, Part One*. Leiden: E. J. Brill.
- Washio, Ryuichi (1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation," *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1–49.
- Wechsler, Stephen and Bokyung Noh (2001) "On Resultative Predicates and Clauses," *Language Sciences* 23: 391–423.